

## ■ 活動記録 ■

## ◆ 研究活動 ◆

## 2016 年度先端社会研究所基盤研究部門 活動報告

## ◆ ソーシャル・ディスアドバンテージ班 (SD 班)

代表：三浦 耕吉郎 (関西学院大学社会学部教授)

本研究班の課題は、いまだ周縁化されている人びと（ソーシャル・ディスアドバンテージを抱える人びと）——LGBT、難病患者、薬害被害者、薬物依存者、障害者、ホームレス、特定労働者（原発労働者、介護労働者）、部落差別被害者、エスニック・マイノリティ、災害被災者等——をめぐり、(I) その歴史的社会的析出過程および構成過程を、近代化・国民国家化といった「ナショナルなもの」の創出という観点から統一的に把握するよう試みるとともに、そうした構成の維持過程、すなわち、今日のさまざまな少数者の不利で差別的な諸状況を維持する原理と仕組みについて、実際の諸状況を国内および国際比較的に記述し分析することによって明らかにすることにある。

さらに、(II) それらに対する支援実践のなかで、周縁の諸カテゴリー間、および各カテゴリー内部におけるコンフリクトや対立、当事者と支援者との間に生ずるディスコミュニケーションなどの現代的困難を、その実際の活動（ワークショップ、セミナー、ミーティング、シンポジウム、イベント等々）に参加しつつ、インタビュー、参与観察や相互行為分析などの観点から記述し、これを上記の分析結果から捉え直すことで、現代的な支援活動の可能性を模索する。

2016 年度に集中的に行った調査・研究は以下のものである。HIV 陽性者・薬物依存者・統合失調症・LGBT への支援実践に取り組んできた「ケアカフェ・バザール」や、当事者の自助グループ「サロン・ド・バザール」に継続的な参加をおこない、複数のディスアドバンテージ（たとえば、ゲイで HIV 陽性で薬物依存等）を保持している人たちのライフストーリーの語りを聞き、その生きづらさの経験を参加者のあいだでシェアする場のもつ意義について深く考えさせられたとともに、必ずしも到達点の一つとは限らない多様な支援のあり方があることを教えられた。さらに、その過程で、マイノリティという概念がえてしてマジョリティでない人たちを一括りにして捉えてしまいがちだったのに対して、ソーシャル・ディスアドバンテージという概念は、どんなディスアドバンテージがあるのか、或いは、なぜそうしたディスアドバンテージが生じたのか、といった歴史的・制度的・生活史的・世界観（世界像）的な問いを誘発することによって、一人ひとりに固有なディスアドバンテージを明らかにしていくうえで大きな有効性を発揮することがわかった。

また、その他の予備的な調査・研究としては、次のものがある。釜ヶ崎支援機構との協同のもとに、ドラスティックに変わりつつある釜ヶ崎におけるホームレスの人たちへの就労・生活支援の意味の変化を、ホームレスのソーシャル・ディスアドバンテージ（社会的不利）が、支援の過程でどのように発見され、いかなる対応がなされてきたのかについて、福祉制度や財源・人材問題からの考察をおこなった。ヨーロッパにおいて血友病患者救済を含めた HIV/AIDS 対策が、どのように

ハーム・リダクション政策をうみだしたのかを探究するため、アイルランドの血友病患者協会元代表であり世界血友病連盟前会長であるオマホーニー氏や、イギリス血友病協会代表等の方々にインタビューをするとともに、日本の現状との比較研究のための基礎資料を現地で収集した。介護労働者や原発労働者の抱えている問題を把握するために、グループホームでの聞き取りや観察、および原発労災裁判の傍聴などを通じて情報を収集した。

開催した研究会・セミナー・シンポジウムは以下のものである。

○2016年度第2回先端研セミナー（SD班第1回研究会）

2016年7月28日（木）15:00～17:30 先端社会研究所セミナールーム

報告者：村島 健司 氏（先端社会研究所専任研究員）

「宗教による災害復興支援とその正当性

——台湾仏教による異なる二つの災害復興支援から——」

○2016年度第1回先端社会研究所シンポジウム

2017年2月21日（火）14:30～17:30 関西学院大学上ヶ原キャンパス図書館ホール

報告者：奥田 知志 氏（NPO 法人抱樸理事長）

川口 加奈 氏（NPO 法人 Homedoor 理事長）

「支援活動から発見されるソーシャル・ディスアドバンテージ

——ホームレス支援の現場から——」

司 会：白波瀬達也 氏（関西学院大学社会学部准教授／先端社会研究所研究員）

○2016年度第6回先端研セミナー（SD班第2回研究会）

社会調査協会・関西学院大学先端社会研究所共催

2017年3月14日（火）13:30～17:00 関西学院大学大阪梅田キャンパス

「ライフストーリーとライフヒストリー

——「事実」の構築性と実在性をめぐって——」

報告者：西倉 実季 氏（和歌山大学）

「ライフストーリー論におけるリアリティ研究の可能性」

朴 沙羅 氏（神戸大学）

「何が対話的に構築されるのか」

岸 政彦 氏（龍谷大学）

「物語／歴史／人生——個人史から社会を考える三つの方法」

司 会：三浦耕吉郎 氏（関西学院大学）

○研究員による関連する研究成果

前田 拓也（客員研究員・神戸学院大学）

『最強の社会調査入門』（共編）ナカニシヤ出版、2016年。

三浦耕吉郎（研究員）

『排除と差別の社会学 新版』（共著）有斐閣、2016年。

『新社会学研究』（共編）第1号、新曜社、2016年。

白波瀬達也（研究員）

『貧困と地域－あいりん地区から見る高齢化と孤独死』（単著）中公新書、2017年。

## ◆文化表象班

代表：鳥羽 美鈴（関西学院大学社会学部准教授）

本研究班は、文化の国際移動と表象の政治を研究テーマに掲げている。プロジェクトの初年度にあたる今年度は、各班員のこれまでの研究業績と本プロジェクトの研究テーマとの接合を目指した。フィールドワークを特に重視しており、その準備と実施、およびフィールドで収集した資料の整理と分析とに時間をかけて取り組んだ。その詳細は次の通りである。

### ○班員によるフィールドワーク

#### (1) 鳥羽 美鈴

調査地：ドイツ南部およびイタリア北部地域

調査滞在期間：2016年6月3日～2016年6月13日

調査成果：国境を越える言語文化に関わる現地調査を実施した。具体的には、ドイツ南部およびイタリア北部の都市、そしてそれらと国境を接するスイス、オーストリアを横断し、言語調査（資料収集と聞き取り調査）を実施した。調査においては、諸国でマイノリティと位置付けられる言語共同体に着目した。その結果、連邦と州が保存と普及に力を注ぐスイスのロマンシュ語が公的規定に従い一定分野で使用されているだけでなく、現に生きた言語として若年層の間でも使用されていることを聞き取り調査から確認できたことは大きな成果であった。同様に、イタリアのドイツ語話者は、同国におけるマイノリティと位置付けられるが、家庭や学校教育で言語が継承されていること、さらに国境を越えてイタリアに渡ったドイツ人やオーストリア人などのドイツ語話者によっても言語共同体の維持が図られていることが明らかになった。総じて、マイノリティという概念の見直しを迫る知見を得た。

#### (2) 鳥村 恭則

調査地：ドイツ・ラインラントプファルツ州 トリア市、ファルシュバイラー村

調査滞在期間：2016年10月31日～2016年11月3日

調査成果：文化の国際移動と表象の政治性研究の一貫として、ドイツ・ラインラントプファルツ州のトリア市、およびその近郊農村であるファルシュバイラー村においてフォークロア表象の実態について、観察・聞き取り調査を実施した。同行した東北学院大学政岡伸洋教授（本学社会学研究科非常勤講師）の指導学生であるドイツ人・Julia Berg氏を通訳に、トリア市内における都市の民俗空間構造の観察調査、およびファルシュバイラー村での聞き取り調査を実施した。これに

より、前者については、都市の境界部におけるキリスト教表象とフォークロア表象の習合状況（キリスト像の境界神としてのフォークロア的流用）、ドイツ農村の歴史表象に先住民ケルト・フォークロア表象が活用されている点など、注目すべき調査成果を得ることができ、本プロジェクトの今後の議論の展開に資すること大である。

### (3) 荒山 正彦

調査地：ドイツ・オーストリア・スイス・イタリアの国境地帯

調査滞在期間：2016年6月3日～2016年6月12日

調査成果：ドイツ・オーストリア・スイス・イタリアの国境地帯にあるアルプス山麓地域において、ツーリズム（旅行・観光）に関する画像資料の収集を行った。具体的には次の7項目に関するものである。1. 地域の案内用看板として掲示されている鳥瞰図、2. 国境地帯を広範囲に示す小縮尺の鳥瞰図、3. 伝統的なまちなみなど一集落を単位とした平面図、4. 広域的な地域の概念図、5. 鳥瞰図と平面図を組み合わせた図、6. 徒歩旅行、ハイキングの道標を含む案内図、7. ツーリスト・インフォメーションに用意されている案内図。

今回のフィールド調査では、本研究班のテーマである「文化表象」について、ツーリズムの画像資料に注目することからアプローチを試みた。今回収集したデータは、分析や考察を行うためにはまだ絶対数に不足はあるが、同一の自然景観をもつアルプス山麓地域において、主体となる国家が異なることにより（国境をはさむことにより）、その「文化表象」ともいえる画像資料（地図）の共通性と差異を確認する手がかりを得ることができた。次年度以降の継続的な調査によって、実証的な分析と考察を行うことも可能であると考えられる。

### ○研究報告

鳥村 恭則、学会発表、「What is Minzokugaku?／民俗学とは何か」（報告言語：英語）、日本民俗学会・ドイツ民俗学会共催国際シンポジウム、「Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany」「ドイツと日本における民俗学の視点と位相」、2016年10月28日（金）、ミュンヘン大学。

大石 太郎、学会発表、「Recent trends in Québec Studies in Japan」（報告言語：英語）、「The 20th Biennial Conference of the American Council for Québec Studies」、2016年11月4日（金）、アメリカ合衆国メイン州ポートランド市。

鳥羽 美鈴、国際大会発表、「Impact of Mediterranean Studies on Japanese Society」（報告言語：英語）、Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes 主催、「Asian Perspectives of Mediterranean Studies：Exchange and Dialogue」、2017年3月11日（土）、釜山外国語大学。

### ○班研究会「先端研セミナー」開催

日時：2017年2月23日（木）13:30～15:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

講師：若松 邦弘 氏（東京外国語大学 教授）

題目：「イギリス政治社会の分断と EU 国民投票」

概要：昨年6月にイギリスで実施された国民投票では、居住地域や階層による有権者の分断が明瞭になった。その意識の乖離は（イングランドとそれ以外という地域性のみならず）近年大きくなってきていた。保守党・労働党というイギリスの政党システムの主軸を担う政党への支持を中心に、国民投票の結果分析を通じ、イギリスの政治社会における意識の分断の様相を検討した。

#### ◆食研究班

代表：鈴木 謙介（関西学院大学社会学部准教授／先端社会研究所副所長）

「食研究班」では、「フードスケープから見るグローバル化」を軸としながら、食とグローバル化の関係についての研究を進めてきた。2016年度は、申請した科研費の採否の判明する時期が夏だったこともあり、年度の前半は主として文献を通じた理論枠組みの検討に充てた。残念ながら研究費の採択には至らなかったが、年度の後半からは学部生・院生を集めての勉強会を毎週開催し、また外部講師を招いてのセミナーも開催した。さらに年度の終盤には海外現地調査を実施し、構築した仮説の検証を進めた。

#### ○ワークショップセミナー

題目：食の未来とこれからの社会－シナリオ・プランニングで考える

日時：2016年12月10日（土）14:30～16:30

企画：キリン株式会社キリン食生活文化研究所

参加者：21名

概要：本企画では、講師としてキリン株式会社キリン食生活文化研究所の太田恵理子氏を招き、参加型のワークショップを開催した。具体的には、食にまつわる社会環境の変化についてデータを交えて紹介した後、参加者がグループに分かれて、今後の日本で生じると考えられる食に関する課題を挙げるというものであった。社会学部、国際学部、経済学部、人間福祉学部などからの参加があり、それぞれのグループから、流通の変化やテクノロジーの進化による社会課題についての発表が行われた。

#### ○勉強会

食研究班の活動や研究課題をより広く周知し、また同様の関心を持つ学部生・大学院生と研究を深めるため、週1回の勉強会を開催した。2016年度は7回の勉強会を開催し、毎回の参加者は4～8名であった。

#### ○海外現地調査

調査地：パリ（フランス）、ロンドン（イギリス）

調査滞在期間：2017年2月9日～15日

調査者：鈴木 謙介

概要：近年、海外での展開が進んでいる日本のラーメン店を取材し、その立地や客層について調査

した。また現地で独自に発達したメニューから、民族・文化・宗教などの異なる現地と日本のラーメン文化がどのように融合しているのかについての知見を得た。